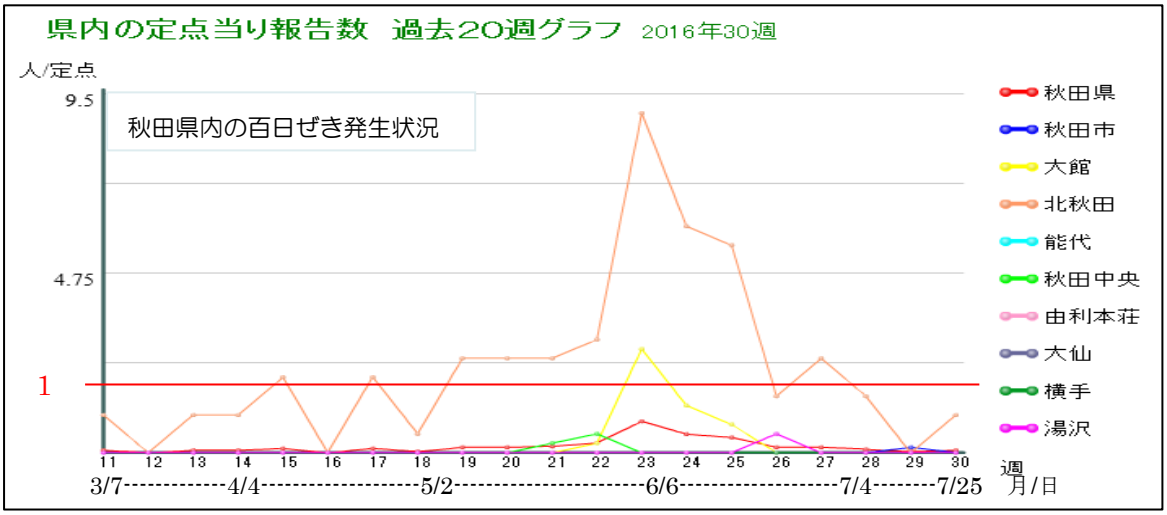
感染情報トピックス　Vol 2　　2016年8月10日発行

県南も「百日ぜき」の流行の兆し！

今年の秋田県の発生状況（保健所別）

今年は、県北地域から３月頃より百日ぜきの発生があり徐々に件数が増えてきています。下記のグラフは、今年３月以降に発生した百日ぜきの定点を秋田県内の保健所管内別に示したものです。３月頃より秋田北管内で流行警報発令され、６月中旬には、北秋田９人/定点、大館 2.75 人/定点と警報発令が続き、かなりの流行となっていました。７月以降、県北での発生は減少傾向となり、秋田市や県南での発生はこれまで殆どありませんでした。しかし、7/25 の週（30 週）から翌週にかけて、当院でも成人や小児から数例ではありますが、発生の報告がありました。百日ぜきは、症状が激しくない場合は受診しませんし確定診断も時間がかかります。感染力はインフルエンザにやや近く、伝播しやすいと言われています。



※定点とは、１医療機関で何人患者が発生したかの目安となる数値。
※百日ぜきの流行警報：初回に定点当たり１人以上発生した場合。その後 0.1 で継続発令。

百日ぜきの特徴

百日ぜきは、風邪のような症状で、それほど発熱はひどくありません。しかし、からせきがコンコンコンコンと続けて出ますので、高齢や幼児や内科疾患のある方は、呼吸困難になることもあります。また、乳児早期では無呼吸となるリスクがあり早めの治療が必要です。

- 病原体：　百日咳菌（Bordetella pertussis：グラム陰性桿菌）
- 潜伏期間：　7～10 日（およそ 6～20 日）　※カタル期が特に感染力が強い
- 感染経路：飛沫・接触感染（鼻腔咽頭や気道からの分泌物。それが付着し間もない物に接触）
- 症状（３期に分類）

①カタル期（約２週間）：鼻汁、軽い咳（せき）などの感冒様症状から始まり咳が強くなる。

②痙咳期（約 2～3 週間）：次第に短い咳が発作性に激しく連続する（スタッカート）、それに続き息を吸うとヒューと鳴る吸気性笛声（Whoop）、このような発作をくり返すレプリーゼが起こる。咳込み後のおう吐も症状の一つ。喀痰がある場合は透明。

③回復期（2 週～2 か月程度）激しい咳は徐々に収まり時折出る咳となって軽快していく。

百日ぜきの検査診断

● 検査①：　採血による百日咳抗体（EIA 法）

PT-IgG（百日咳菌毒素抗体）・FHA-IgG（繊維状赤血球凝集素）検査。外注のため2～5日程度かかる。カタル期以外では検出されないことがある。

DPT3、4 種混合ワクチン接種者（特に接種日が近い）場合は、PT と FHA 抗原が使用されているためペア血清を推奨。（2週間以上間隔をあけて再度抗体検査を実施）

◇百日咳抗体（EIA 法）の判定

PT-IgG　FHA-IgG 正常値　：**10　EU/ml 未満**　　**100 EU/ml 以上**では発症を考慮

● 検査②：　遺伝子検査（LAMP 法）　検査材料：鼻腔ぬぐい液、喀痰など（咽頭は不可）

遺伝子レベルで検出が可能だが、現在は保険適応外となっています。

院内検査で当日～翌日には判明。感度が高いため痙咳期でもほぼ検出可能。

◇百日ぜき遺伝子検査の判定　・・・　正常値：**陰性**　　異常値：**陽性**

● 細菌培養検査：　培養は7日以上必要なうえ、特殊培地を使用しなければならない。カタル期での検体採取することは少なく、痙咳期では殆ど分離同定は難しい。陽性率は 10%程度と言われている。（当院では一般検査では実施していません）

百日ぜきの治療と対策

● 治療：　マクロライド系抗菌薬など（エリスロマイシン、クラリスロマイシンなど）を投与。内服後 5 日程度でかなり排菌は減少するが、再排菌を考慮し状態に応じて 7～14 日間内服する。　主な抗菌薬名：エリスロシン、クラリス、ジスロマックなど

● 予防投与：乳児早期では、発病すると無呼吸発作を起こし重篤になることもあるため、同居家族など濃厚接触者は、マクロライド系抗菌薬または ST 合剤の予防投与を受けることがある。

● 対策：　感染者と接触があり、咳がひどいなどがあれば早めに受診。
せきエチケットの実施　（咳のある方はマスク着用　人ごみではできる限りマスクを）
家族が発症した場合は、予防投与を受けることを推奨

● 感染者の対応：　インフルエンザ対策と似ています。
① 介護者はマスクを着用
② 抗菌薬内服 5 日程度たつまではなるべく個室に分離。
この期間は、食事も家族とは一緒にとらないでください。
③ せきだけで比較的軽症の場合は、感染者がマスクを着用。

【注意！】軽症であっても、再発しますのでしっかり医師の指示通りの期間必ず抗菌薬は内服してください。（病状や薬の種類によって 7 日～14 日間と違います）

これからお盆の時期は、お祭りや厄払いのなどの行事で、たくさんの人と接する機会がグ～ンと増えると思います。楽しい時間が感染症にかかってしまい台無しにならないように、日頃からちょっとずつ予防をして頂ければと思います。また、「かかったかな？」と思ったら、早めに受診して適切な治療を受けましょう。

参考資料：国立感染症疫学センター感染症情報　感染症診療マニュアル　日本呼吸器学会「咳嗽に関するガイドライン第 2 版」